



美藝公
筒井康隆・作
横尾忠則・画
文藝春秋

(2/20刊・¥1,900)

オルタネート・ワールド物の一種であることは間違いない。その世界は、たとえばハリソンの『大西洋横断トンネル、万歳!』と同様、“古き良き時代”の色彩に満ちている。

もうひとつの日本では、映画が最大の産業である。美藝公とは、俳優最高の称号。その力は、政治に直接の影響を与えるほどだ。本書は、そんな世界での映画ポスターがふんだんに収められた、豪華な異色作である。主人公の脚本家と女優との古典的な恋愛をからめながら、美藝公が新しい映画『炭鉱』を作り上げていく過程が描かれている。最後には、主人公たちの議論から、架空の世界として、今われわれの住む現代日本そのままが剣き出しにされる。『美藝公』は、著者の映画に対する思い入れによって書かれたユートピア小説といえるだろう。従って、その世界から見た現在の日本は、いかにも非文化的で軽薄だ。オルタネート・テイヴ物では、どんな作品でも必ずこういうシーンがある。そのテーマによって、微妙な差異の生じるところが面白い。

もうひとつの世界の中に、さらなるもうひとつの「映画」を封じ込めたのが、本書の新しさである。

(俊)